

即ち モイストペレット餌料は初期に摂餌量が少なく、後期になればなるほど増加し かにかま餌料より その増加率は高い。

試験(1)で考察したように 試験(2)の摂餌の傾向からも、シラヒゲウニに対するモイストペレット餌料の嗜好性は かにかま餌料に比べて劣ることが明らかである。

試験(1)に比べて 試験(2)ではかにかまとモイストペレット給餌区の間、平均摂餌量及び平均摂餌率の双方において その差はわずかであるか、等しい(7表)。試験(1)に用いたウニは試験開始直前に自然環境下から採取されたものであり、試験(2)のウニは試験開始前4ヶ月以上にわたって、モイストペレットを含めて ホンダワラ等の生海藻を給餌され、陸上水槽の飼育環境下にあったものであり、飢餓状態か、モイストペレットに慣れ易い何らかの条件下にあったことが考えられる。このことが摂餌量及び摂餌率の点で試験(2)においてはかにかま給餌区とモイストペレット給餌区の間にはほとんど差がない結果になったものと考えられる。

したがって 試験(2)の結果から、かにかまとほぼ同等の摂餌量に達するのは試験開始から31~35日目の間になると考えられるが、自然条件下にあるウニがモイストペレットに慣れるのは、なおそれ以上の長期の日数を要するものと推察される。

試験(1)では 慣れるまでには75日を要するとされたが、試験(2)の結果は これに相反するものではなく、むしろ支持するものである。

したがって 試験(1)で考察されたように、マイワシと米糠を主体とする配合飼料(モイストペレット)の嗜好性は劣り、本試験の目的からすれば 嗜好性の改善は必須の課題であると考えられる。しかしながら 他方慣らす工夫の検討も また必要であるようだ。

“み入り”と蛋白摂取量 “み入り”即ち生殖腺重量については

かにかま  $\geq$  モイストペレット  $>$  アナアオサ

の関係がみられた。その結果を蛋白摂取量との関係で示すと 8表及び図-6のとおりである。

8表 “み入り”と蛋白摂取量

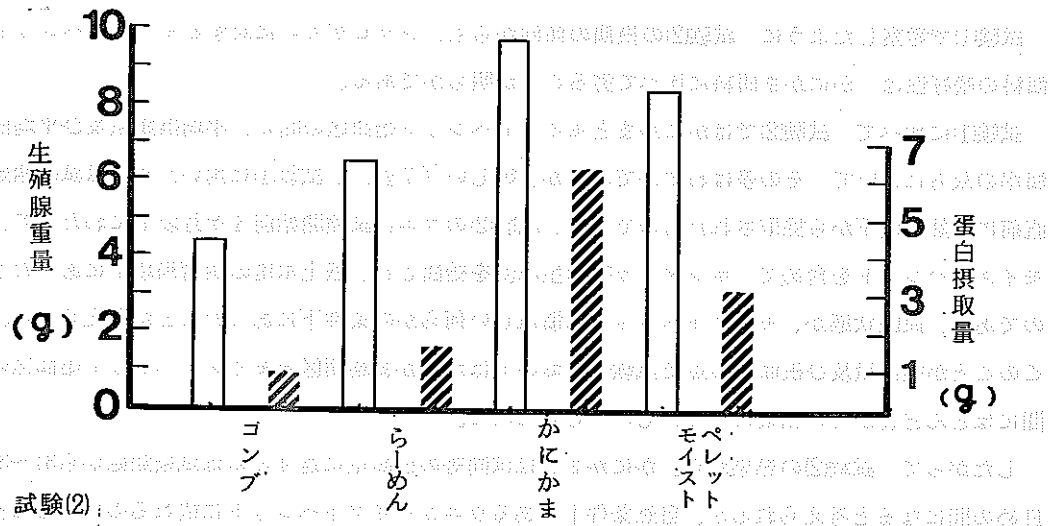
試験区	GW (g)	GW/BW×100 (%)	摂餌量 (g)/日	摂餌率 (%)	蛋白摂取量 (g)	
					41日間	31日換算
かにかま	19.7	6.4	3.6	1.2	(146.9×7.9/100=)	11.6 8.8
モイストペレット	18.5	6.3	3.3	1.2	(134.1×9.1/100=)	12.2 9.2
※アナアオサ	10.2	2.9	3.1	1.0	(3.1×41×2.9/100=)	3.7 2.8

※-1 アナアオサについては摂餌率を1%、アナアオサ中の蛋白含量を14.4% (ヒトエグサ干=14.4%栄養化学 堀田ら、南江堂)とし、水に戻した際のアナアオサの増質倍率を5とした。なお、生のアナアオサ *U. Pertusa* 蛋白含量については、Fuji (1967) P. 128 Table 21から8.6%と計算される。ここでは上記によった。

※-2 摂餌率を1%とした根拠

餌料の種類	ウニの種類	大きさ	時期	日間摂餌率	
アナアオサ	シラヒゲウニ	65~95 mm	7~9月	0.5%	Huang, 1980
	エゾバフンウニ	20~35 g	7~11月	1.1~2.2	Hayakawa & Kittaka,
	エゾバフンウニ	40~55 mm	1~6月	1.0~2.2	Fuji, 1967 1984
	バフンウニ	25mm	不明	3.7	増殖委員会, 1982
	シラヒゲウニ	118~126 mm	9~2月	0.3~2.0	渡辺, 1987

試験(1)



試験(2)

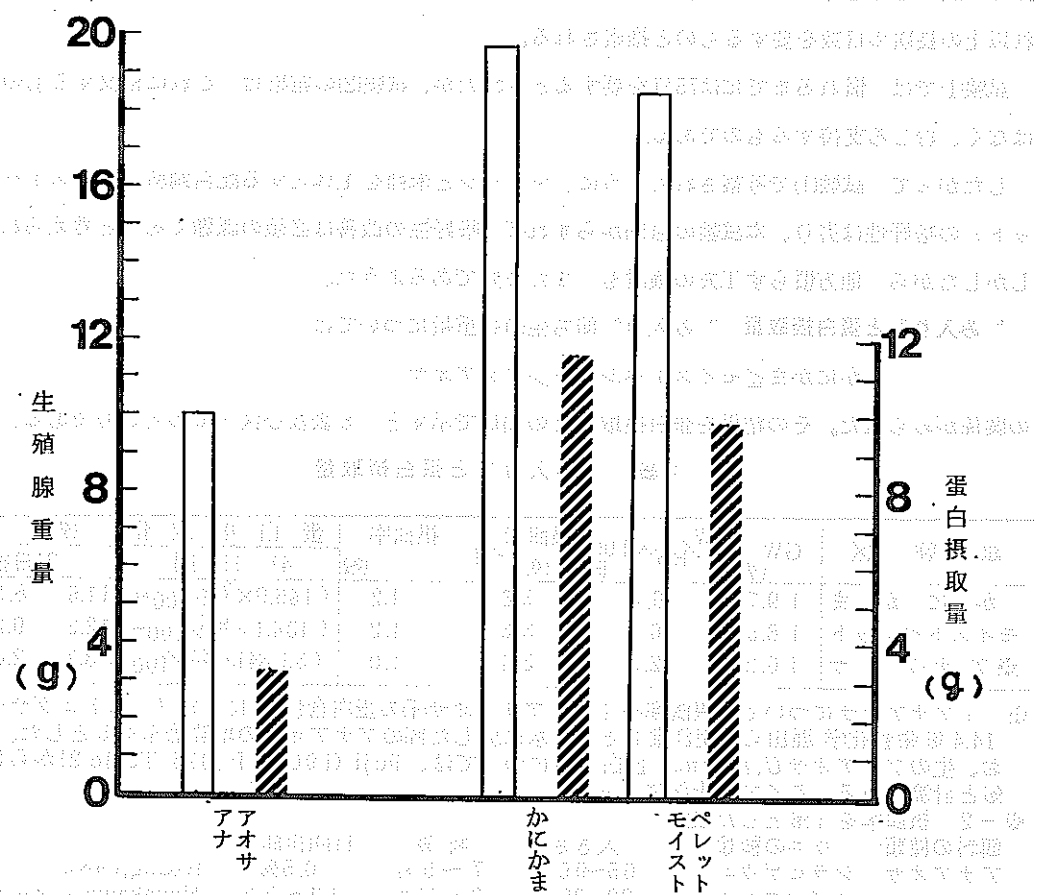


図-6 蛋白摂取量と“み入り”

□ ; 生殖腺重量      ▨ ; 蛋白摂取量